

新会長挨拶

小川博久

2006年5月19日に開催された新理事会で、日本保育学会会長に選出され、向こう三年間、会長の責務を遂行することになった。前期、会長に選出されたときは、一期で職責を終えることを考えてきたが、執行部を支えて下さった方々が、相次いで引退される中で、この三年間の学会の未解決課題への取り組みを放棄したままにしておくわけにはいかないと考え、会長の任務を引き受けることにした。会長職を継続するに際して、現在、当面する課題解決のために、決意を新たにすることを会員各位に表明し、出来るかぎり努力をしていくことを約束したい。そこで、過去三年間を振り返り、今後三年間の方針を提案しよう。

三年前、会長に就任した折には、執行部の経験がなかったので、会運営に関する私の提案は非現実的な部分も多く、結果的に未達成の部分も多く見られた。しかし、今回は具体的懸案事項が明確になってきている。最大の懸案の一つは、法人化に向けての組織改革である。組織検討委員会の新理事、新常任理事を中心に新たにメンバーを再組織し、この課題に取り組んでいくつもりである。

第二に、前年度までの法人化に向けての事務局体制の整備、事務局員の雇用体制や業務内容の系列化と責任体制の確立、財政的条件の整備と公益法人化に必要な条件整備など個別に取り組んできた課題の最終的な整備を完了する予定である。

第三に各種委員会の規程の見直しと修正に関しては、漸次進められているが、この整備を完成させる。各々の委員会の相互関連や命令系統の明確化にはまだ課題が残っているので、法人化に向けても着々と進めていく必要がある。

第四に、研究推進のための様々な問題の解決である。『保育学研究』のあり方については、改善されて

きた。投稿論文の増加と論文内容の多様化にともない、審査の厳正化と適切化が求められている。編集委員の数や専門分野の適正配分、編集者以外の査読者の選定と依頼等、検討すべき問題もある。また査読結果についての問い合わせもあり、検討すべき課題もあらわれてきている。また課題研究を実施された会員の執筆論文の『保育学研究』への掲載問題についても、課題は残っている。研究奨励賞については、二部門に分かれ、選考規程も明文化された。保育学文献賞の選考については、選考委員の数や資質、選考方法など見直しが迫られている。

第五に、学会大会のあり方についてである。大会運営に関してはノウハウが集積され、大会開催担当者の負担軽減に役立ち、向こう三回の開催校の見通しが立ちつつある。しかし、大会の大規模化を防ぐこと、VTR発表やポスター発表を増加させ、実践研究や現場の参加の増加を図る手だてや研究発表の水準を高める工夫、発表論文集の巨大化をさける工夫など、解決すべき課題も多い。

第六に、国際化に伴い、韓国幼児教育学会、韓国嬰幼兒保育学会との学術交流の協定書を取り交わした。今後、多様化する国際交流を組織化し、日常化するためには、国際交流委員会のスタッフの充実、OMEFとの協力関係の確立、必要経費などの整備が求められる。

最後に、少子化問題に関わり、幼児に関する多様な政策的提案がなされ実現されている中で、幼児教育の専門家集団である日本保育学会からのマスコミや公共機関への見解表明と政策提言が求められている。学会としては、共同研究委員会による緊急意見表明を含め、世論へのアピールを行ってきた。こうした側面での学会活動を活性化する努力をしていくつもりである。

● 特集 ● 第59回大会レポート (於：浅井学園大学)

第59回大会は、「拓く・展がる・つながる」をテーマに、参加者の知的関心を刺激してくれる多様なメニューが用意され、開催されました。研究発表も様々な分野にわたり、多数なされました。これらの内容がこれからの保育研究や保育実践につながっていくためには、それらが提起する問題を考えることが大事であると思われます。参加者のレポートを通して、保育学の問題を考え、今大会の意義を深めたいと思います。

第59回大会を終えて

準備委員長 大西道子

日本保育学会第59回大会は、去る5月20日、21日の両日、浅井学園大学を会場に開催されました。幸い両日も晴天にめぐまれ、風薫る北海道の5月、この好天で札幌の木「ライラック」の開花も始まり、爽やかな自然の下で開催できました。学会長はじめ北海道開催を望まれた学会参加者・関係者皆々様の願いが天に通じたことを感謝しております。

記念講演をいただきました旭山動物園々長小菅正夫先生をはじめ、木育フォーラムでは、北海道庁と森の美術館「木夢」館長(西興部村)の伊藤英二先生、てい談・企画シンポジウム・ドサンコーザにご登壇いただきました諸先生、国際フォーラム、学会課題シンポジウムの企画とご登壇頂きました諸先生さらに本学会に出席いただきました参加者の皆様に対し、心より厚く御礼申し上げますと共に、大会が盛会裡に終了しましたことをご報告申し上げます。

このたびの学会は、参加者約2000名(予約会員991名、当日会員315名、臨時会員540名、臨時学生会員176名)、研究発表件数は562件(口頭発表381、ポスター140、自主シンポジウム36、ビデオ発表5)でした。予想を超える研究発表と参加を頂き準備委員一同、重ねてお礼申し上げます。

大妻女子大学での大会から引き継いでの1年を振り返ってみますと、まず企画具体化の段階です。準備委員の興味・関心・課題を全国の会員皆様にとって魅力ある内容に「展げ」、「今・未来の子ども」の幸福につながることに絞り込む検討にかなり時間を要しました。登壇者の決定や依頼・広報活動等が遅れがちになり、焦りもありましたが準備委員間の「拓く・展がる・つながる」充実の時間でもあり、大会テーマを実感しながらの進行でした。申し込みから原稿受付・プログラム作成の段階では、会員の方々との対応で苦しいことが多々生じました。各種締め切り期日のルールの徹底です。厳正公正を期す難しさが大変手間取りました。次に申し込み時整理票と原稿と原稿の整理票の題目・連名者の相違です。このチェックは予想をはるかに超える作業量でした。また発表期日を指定される方もおられましたが、ご希望に沿うことは至難の業であることをこの場でお知らせしたいと思います。また機器使用に絡み教室変更が生じ、論文集・プログラムの校正作業は、発送後もなお続きました。今後の大会運営のためにも会員の皆様には、準備委員会からの通信を熟読していただきたくお願い致します。準備委員会の不手際も重なり座長の変更・移動等、論文集・プログラムに訂正が多くなり、会員の皆様には大変ご迷惑をおかけしましたことをお詫びしなければなりません。当日においては、会場への交通や教室移動の複雑さがあり、多くのクレームを予想しておりましたが、プログラムはスムーズに実行できました。一重に皆様のご協力の賜物と心より感謝申し上げます。

2007年は大会経験豊富な諸先生の多い十文字学園女子大学で開催されます。第60回記念大会にふさわしい大会となりますよう、第59回大会準備委員会一同、心より祈念いたします。

最後に、これまで本学会には周回の参加がほとんどの準備委員が20数回の準備委員会を重ね、日頃の課題を道内にひろげ全国につなげる熱意と盛り上げりを体験する機会をいただきましたことを感謝いたします。

■ お 知 ら せ ■

■第60回大会開催(予告)

月 日：2007年5月19日(土)・20日(日)

会 場：十文字学園女子大学

開催校：十文字学園女子大学

URL:<http://www.jumonji-u.ac.jp/hoiku60/index.html>

■第60回大会研究発表申込みについて

研究発表予定者(連名者を含む)は、平成18年度学会費を9月末日までに納入済みであることが条件となります。未納者は、発表できませんので、ご注意下さい。発表申込みをされた方が、年度会費未納である場合に、年度会費請求等の連絡はいたしません。大会発表申し込み締切も9月末日(自主シンポジウムは8月31日)です。

乳児保育（0、1、2歳児の保育） 関連の口頭発表を聞いて

川合 貞子

「北海道の5月は、花々が一斉に咲き、木々が芽吹く、1年で最も美しい季節です。」

という第59回大会準備委員長・大西道子先生のお言葉（日本保育学会会報No.134）どおり、透明感にあふれた北海道の春に迎えられて学会に参加しました。

乳児保育の一般化が実施されて10年になろうとしています。周知のとおり近年、少子化はとどまることなく、一方で次世代育成支援行動計画の実施、認定こども園の制度化などの施策がすすめられ、新しいタイプの保育サービスの拡大がはかられようとしています。そして経済コストを優先する現実の中で、とりわけ0、1、2歳児保育へのしわ寄せは大きく、人間として生きる力の基礎を培う大切なこの時期の保育を危惧する声は大きくなるばかりです。

これまで、「子どもの最善の利益」という視点の基に、乳児保育の「保育の質」について多くの研究・実践が積みあげられてきましたが、今その積みあげられた保育内容・方法の問い直しや、新たな検証による理論形式と実践が求められているといえましょう。

このような思いで口頭発表に参加しましたが、継続研究や研究者と実践者の共同研究が多く、研究への意欲的な取り組みを強く感じました。そのいくつかを見ますと、0、1、2歳児が一日の大半を過す「担任」についての再考、子ども同士のかかわりの生成など集団保育での人的環境の視点から、子どもの安定した、安心できる生活の保障や、低年齢児が共に生活することの意義が検証されています。

食援助、絵本の読み聞かせ、低年齢児の長時間保育の研究では、その成果を食援助プログラムとして開発し、絵本リストや情報の提供、育児の共有化をはかり親子の絆を確実なものとするための保護者へのアプローチなど、それぞれの研究成果をフィードバックすることをとおして家庭支援、子育て支援を実施していることが発表されました。支援に対してその役割を保護者が自覚化することの大切さを改めて考えさせられました。

また赤ちゃんの泣きについての一連の研究は、実験やインタビューの研究法を用いて、泣きとその対応の双方向から検証され、『2004年に国連の子どもの権利委員会が「乳幼児は泣いたり、ぐずったりすることで、自分の感情や願いを発信し、ことばにならない意見を表明している。」として、乳幼児の権利について大人が適切に対応するようにとの問題を提起している。』（子どもの文化、2006年6月号）こととの関連の中で興味深い発表でした。

口頭発表は発表時間も限られ、研究テーマや方法も多様であり、討議も十分できないという声もありますが、研究者と実践者とも含めたその多様性が保育の土壌を豊かにし、多様からの選択、多様なアプローチの中に保育への自覚化も育まれるように思います。学会は字のごとくまさに学びに出会うとき、学び会（合）うときといえましょう。研究の目的・方法はあくまでも「子どもの最善の利益」の視

点に立ち、新たな乳児保育の創造に向って欲しいと願ったときでもありました。

●Profile

川合 貞子（かわい ていこ）
東京家政大学家政学部児童学科

第59回北海道大会に参加して 記念講演での感想から

小 関 祐 一

今回の大会に参加し、もっとも印象深く心に残ったのは、あの旭山動物園園長・小菅正夫氏の記念講演だったので、その感想を記すことにする。

旭山動物園はいま最も注目を集めている動物園として知られている。小菅園長は人気の背後にあるその理念を次のように語ってくれた。「動物園でなければできないことは、多くの人に動物と共にあることの心地よさを感じてもらい、野生動物との共生を希望する人が一人でも多くなってくれること。これこそ動物園にしか出来ない自然保護活動で、そのためにこそ動物園は存在する。飼育係はそのために動物を飼育している。その最終目標は、自分の飼育している動物のすばらしさを多くの人に理解させ、その動物がいつまでも地球上で生き続けられるよう支援してくれる人を一人でも増やすことにあると考え、従来の飼育係を飼育展示係という名称に変更した。この意識改革が旭山動物園の原点である。そして、飼育展示係が野生動物の魅力をいかにして伝えるかを考えることで、動物たちは生き生きと活動するようになり、来園者も幸せに暮らす動物たちの姿を見ることで大きな喜びを感じている。そして、『なぜ、動物を見て楽しく感じるのか』を突き詰めて考えてくれれば、この地球上に多くの動物が生きることが、いかに人間にとって大切なことであるかを理解できると思う」と。

このお話を聞きながら、以前この動物園を訪れたときの動物達の生き生きした姿を思い出していた。そして、その言葉を次のように保育に当てはめてみたくなった。「幼稚園でなければできないことは、多くの人に子どもと共にあることの心地よさを感じてもらい、子どもと共に生きたいと希望する人が一人でも多くなってくれること。これこそ幼稚園にしか出来ない自然保護活動で、そのためにこそ幼稚園は存在する。そこで遊ぶ子どもたちを眺め、『なぜ、子どもを見て楽しく感じるのか』を突き詰めて考えてくれれば、この地球上に子ども達と共に生かされていることが、いかに人間にとって大切なことであるかを理解できると思う。」と読み替えると、保育での意味深いメッセージを読み取ることが出来るのだ。

動物（自然）と人間、子どもと大人、互いに共に生かされ、かつ、互いに大切な存在として恵を与え合いながら生きているという、当たり前のことをいつの間にか忘れていたことに気付かされた。

現代社会は、あまりにも人間（とりわけ大人）中心に合

理性を追求し過ぎた結果、いつの間にかわれわれの生活が自然から遊離したものになっている。いま、その弊害があちこちで出始め、ようやく自然に優しくとか、自然を守ろう等と叫ばれるようになってきた。しかし、われわれ大人は、どれだけ真剣にその重要性を認識しているだろうか疑問である。なぜなら、子どもは本来、自然そのものの存在であるから、もし自然に優しくあるいは守ろうというなら、われわれにとって、もっとも身近な自然である子どもたちに、優しくあるいは守ろうとする心が向けられていなければならないからである。だが、現実はどうだろうか？ 幼き命が大人たちの手によって奪われる事件が、連日のように報じられているのではないか。

われわれは何としても、この様な現実から子どもの育ちを中心に生きる営みへと軌道修正しなければならない。子どもは、われわれ大人達が求め続けてきた合理性の対極にある不合理な存在であって、そのことに価値があるのではないか。自然（子ども）は、人間が思い描くような合理的な対象ではないし、だからこそ、われわれはその不合理としっかり向かい合い、そこで与えられる恵に、幸せを実感し生きる道を目指したいと思う。

●Profile

小関 祐一（こせき ゆういち）
（学）北見のぞみ幼稚園 園長

研究テーマ：「フレールベルの保育思想に学ぶ」。「幼稚園の保育参加を通じ、如何に親心を耕すか」。

日本保育学会第59回大会に参加して

山田 りよ子

就学前の教育や保育の世界に関して、世の中一般はあまり関心を寄せてこなかったといってよい。しかし、少子化は将来の国を支える人材の不足につながるという事態が見え始めたたん、経済界をはじめとする様々な業界が、興味津々でこの事態を見つめ始めた。さらに、その事態にお金を投じようとする制度にあやからうとする思惑が見え隠れし始め、今まで良いとはいえないまでも、のんびりと変わらずにいた保育の世界が、大きく変わり始めているのである。平成元年度に幼稚園教育要領が発達を中心としたものに方向を定め、それとともに設置基準が各園の自主的な取り組みを促すように大綱化され、これから各園が質的なものを求めて変化をしようとした矢先のことである。保育の本質を論議する中で、保育が変化していくのではなく、お金が絡んだ各界の力関係が保育の枠組みを壊し始めている。このような現状では、質の高まりを期待できない。保育研究は、こういった現状にどの様なかたちで一石を投じることができるのだろうか。私は、今回の日本保育学会第59回大会に参加するのにあたり、この保育の質に対して研究者たちが立ち向かっていこうとしている方向性について、興味があった。

企画シンポジウム1では、指定討論者の河邊氏から保育現場同士のつながりや養成校とのつながりの中で、現場で

の問題を共有できないかという指摘があった。また、それらを可能にするための研究者の関わり方がもっとあってよい、というさらなる指摘があったように思う。これらは、一昨年の大会から感じられる流れにそった指摘にも思えた。大会のテーマのひとつである「つながる」ということが具体性を持った取り組みとしてなかなか見えてこない、それがこの世界の複雑な現状を物語っているかのようである。

養成校が行なっている子育て支援も増えてきている。運営としてNPO法人子育て支援グループと提携しているユニークな取り組みも報告されていたが、基本的に保育者を養成する立場として質の高い保育の方向性が現れる取り組みが期待できる。世の中が動いていく方向に流されるのではなく、むしろ保育のありようを世間に対して「こうあるべきだ！」と示していくことにもなるだろう。自主シンポ16・36での実践報告では、子育て支援が①「観察」や「実習」「ゼミ」などの授業として、②子どもの遊びの場であり、学生が子どもとかわる場、③主に親が学生に子育てを教えるなど学生と親がかかわる場、④親に子育て（環境）情報を提供する場、として存在しているようである。特に④に関しては、親向けの講座を設けることのほか、保育環境として質の高い方向性を持つ、生の花や野菜、絵本、遊具などの提示が見られ、幼稚園や保育所においても示唆される環境提示であったように感じられた。

保育はどのような立場であっても、子どもの発達を保障する場として質の高さを追求しなくてはならない。それが可能になるための研究者の高い意識と心意気が感じられる学会を目指したいものである。

●Profile

山田 りよ子（やまだ りよこ）
藤女子大学人間生活学部 保育学科
札幌市出身。幼稚園教員として、約15年の経験がある。保育の現場と短大や大学を入れ替わりに行き来し、保育の奥の深さを感じている。子ども大好き人間。上越教育大学修士課程を修了。

「保育をめぐる学会間のつながり」から

横井 紘子

第59回大会の報告に際し、原田彰先生・無藤隆先生・小川博久先生のてい談を選ばせていただいたのは、個人的に二つの理由があります。一つ目は、大学院生の私にとって、保育が学問としてどのように位置づけられるかという問いは、自分の立っている場所・進む方向を確認・模索する上で、センシティブであると同時に、避けては通れない問いであったからです。二つ目は、一つ目の理由に起因するものではありませんが、保育学研究には様々な方法が混在している中、何をもち「保育学研究」と呼べるのか、自分自身の研究を考えるにあたって、危うさ・難しさを感じていたからです。

てい談では、保育学独自の研究方法はありうるのか、という問いが小川先生より提出されました。保育学においては、研究方法如何より前に、子どもを取り巻く種々の問題

が実際に存在していること、つまり、問題領域が方法より先にあることが確認されましたが、このような保育学の特徴を認めた上で、保育学独自の方法論を考えていくことはできるのか、そこに学際性を求めることはできるのか、といった議論が展開されました。その中で、原田先生は、ご自身の研究の経験から、教育現場と研究の関係を問題にされる中で、学際的な方法の在り方を、「子ども」をキーワードにして模索されているように感じられました。無藤先生は、既存の学問を単に合わせるという形ではうまくいかないと、学際的な研究の困難さを指摘されながらも、学問として悪戦苦闘する場、議論する場を定期的に頻繁に持つことで、その困難さを乗り越えられる可能性があるとも述べられていました。

保育学研究のこれまでの在り方については、先駆的な研究が出されてもそれを体系的に積み重ねていく努力がなく、再生産がなされていない等と無藤先生から批判がありました。このことに対しては、最後の小川先生のお言葉を借りれば、「言語化されていないものを言語化する」努力が必要だと個人的に感じました。

小川先生は、保育学研究の在り方を考えるにあたり、保育学と実践との不可分性を指摘され、その中で、言語化されていない保育者の実践を言語化し、実践の知へと昇華していくことが保育学研究として重要だという文脈で上述の言葉を用いられていました。実践を言語化することの重要性はもっともではありますが、今後は、個々の研究が多数の保育学研究の中でどのような位置にあり、どのようなベクトルを有しているか等についても、意識化し、明確に言語化していく努力が、保育学研究の有機的な体系を創り上げる上で必要ではないかと思いました。

今回の対談は、学問間のつながりという視点から、前述したような保育学の位置や方向性、保育学研究の在り方を主題的に取り上げたものであり、「保育学」の根本を問う、非常にラディカルな試みであったと理解しています。様々な課題を発見し、考える契機となりました。

●Profile

横井 結子 (よこい ひろこ)
お茶の水女子大学人間文化研究科
人間発達科学専攻 博士後期課程